

<後期オリエンテーション>**A. テーマ：キリスト教思想研究入門——宗教哲学、アジアのキリスト教思想****B. 目的**

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

C. 内容

今年度前期は、「キリスト教と宗教哲学」という研究テーマについて・・・

後期は、「アジアのキリスト教思想」という研究テーマについて、多様な文脈を整理しつつ、検討が行われる。日本では、植村正久、海老名弾正、内村鑑三、賀川豊彦など、韓国では、土着化神学、民衆の神学、中国・台湾では、宋泉盛、Pan-Chu Lai、インドでは、Aloysius Pieris などの思想を紹介し、アジアのキリスト教思想研究の可能性を探りたい。

D. 確認事項

受講者には、前期と後期に、一回ずつの研究発表が求められる（キリスト教学学部生には原則的に発表が求められる。ほかの者はレポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

E. 授業スケジュール

前期：キリスト教思想と宗教哲学

後期：アジアのキリスト教思想

後期オリエンテーション 10/2

A. 日本のキリスト教思想

1. 植村正久 10/9
2. 海老名弾正 10/16
3. 内村鑑三 10/23
4. 内村鑑三と無教会 10/30
5. 京都学派とキリスト教思想 11/6

B. 研究発表

6. 研究発表1 11/13
7. 研究発表2 11/20
8. 研究発表3 11/27

C. アジアのキリスト教思想

9. 韓国キリスト教
10. 民衆神学
11. 中国キリスト教
12. キリスト教と土着化論
13. インドのキリスト教アシュラム
14. ピエリスの解放の神学
15. インドネシアのキリスト教

<導入1>**戦前日本におけるキリスト教研究**

（日本宗教学会第 68 回学術大会パネル「戦前までの日本における諸研究の現在の意義」より）

この発題の目的は、まず「戦前日本におけるキリスト教研究」を概観し、続いて、その現代的意義について若干の指摘を行うことである。なお、「戦前日本」ということで問題となる開国（一八五九年）から敗戦（一九四五年）までのキリスト教研究を担った研究者については、次の三つの世代に区分することができる。第一世代は、明治期のキリスト教思想を担った、海老名、植村、内村などのキリスト教指導者たちの世代であり、ここにキリスト教研究の発端を確認することができる。また、第二世代は、波多野や石原らからはじまり、有賀に至る、大正から昭和に活躍する世代である。それに対して、第三世代の研究者は、戦後にその研究を公にしはじめ、戦後のキリスト教思想を担う世代であり、本発題の範囲からは除外される（したがって、1946年の北森の『神の痛みの神学』はここでは扱わない）。以下の「戦前日本におけるキリスト教研究」の概観は、その範囲を第一世代と第二世代に限定することができる。

最初期のキリスト教研究は、植村正久、内村鑑三、海老名弾正、小崎弘道などの第一世代のキリスト教指導者たちによって担われた。その発端には、宣教師が伝えたキリスト教思想が存在するが——伝統的で保守的な神学あるいは素朴な信仰——、こうした伝えられたキリスト教思想は、驚くべき早さで、これらの第一世代のキリスト教指導者によって消化され、日本語におけるキリスト教研究書となって刊行された。先に挙げた植村の『真理一斑』はその点で画期的な意義を有している。しかし、第一世代のキリスト教研究者は、専門的なキリスト教研究者ではなく、基本的にはキリスト教会の指導者であった点を忘れることはできない。こうしたキリスト教研究のあり方は、しばらくすると、一方における、キリスト教会あるいはそれに依拠した神学と、他方における、近代的学問としてのキリスト教研究との間の緊張を生じることになる。植村が関わることになった新神学問題、そしてその後の海老名弾正とのキリスト論論争（一九〇一年～一九〇二年）は、キリスト教研究における教会神学と近代的学問との対立の顕在化と解することができるであろう。

戦前のキリスト教研究も、大正期以降の第二世代の研究者になると、個々の研究領域での研究の深まりがみられるようになり、同じ欧米のキリスト教研究の紹介であっても、その水準は本格的で体系的な仕方で行われるようになる。その意味で、現代に至る、日本におけるキリスト教研究の基盤は、この第二世代の研究者によって形成されたと言えることができるであろう。これは、第二世代の研究者の活動の場が、キリスト教会や神学校に限定されず、帝国大学にまで広がりつつあることにも現れている。こうした動向は、宣教師から始まり教会と神学校に根付いた教会的神学的なキリスト教研究から、近代的な学としてのキリスト教研究の自立と解することができるかもしれない。それは、欧米のキリスト教研究の紹介において、英語圏のキリスト教研究からドイツ語圏のキリスト教研究へのシフトが生じていることから伺える。この第二世代の研究において、現代日本のキリスト教研究の基盤は形成されたのであり、実際、高度な学問的成果も確認できる。たとえば、波多野宗教哲学は、戦前の日本のキリスト教研究の精華と言えるべきものである。

以上の概観からわかるように、戦前日本のキリスト教研究は、欧米のキリスト教研究の流行に依存し、それを追跡することを主張な課題としたものであって、その限界を指摘することは難しくない。しかし、第一世代から第二世代の研究者等が据えた土台こそが、戦後から現代に至るキリスト教研究の基盤をなしていることについては、正当な評価を行わねばならず、現代日本のキリスト教研究にも、その批判的継承が求められているのである。

<導入2>

アジアのキリスト教研究をめぐる 方法論的考察

1. 「アジア」「の」「キリスト教」をめぐる諸論考から。

問いの分節化を行う（哲学的掘り下げの必要性）。

主格、属格、与格、对格、奪格／言語的、地理的、歴史的／主体と受け手

↓

- ・分節化された構成要素のいくつかが含意されれば、それは「アジアのキリスト教」の問題圏に含まれる。この問題圏はネットワークを構成する。
 - ・形式的分析から内実の議論へ踏み込むことがなければならない。
仮説的に内実を押さえて議論を開始すること、その際に、「アジア」の多様性と共通性に留意すること。
2. 形式レベルでの議論は問題を整理する上で大切であるとしても、これに留まる限り、有意味な議論へと進むことはできない。

アジアの内実、日本の内実の理解が、暫定的であっても示されねばならない。

しかし、アジアも日本もその内実は自明ではない。

キリスト教本質論（本質と原理。過去、現在、未来）を参照すること。

「本質」を、特定の歴史的地点において理想化して論じることは可能か
現在と未来の緊張から「本質」を問うことの意味

現代的な用語法の尊重とそこから何を目指すのかという観点

過去の規範化の問題、正統？

3. 「アジアのキリスト教」「日本のキリスト教」とは、規範概念である前に、記述概念として捉えるべきである。

「の」を所有格に解すべきか、対格的に解すべきか、ではなく。

いわゆる土着化と批判とは、あれかこれかではない。

あるいは、アジアは地理的概念と解すべきか、歴史的概念とすべきか。

言語性が基準であるべきか、民族性あるいは出自性が基準であるべきか。

といった問題設定は、議論のはじめに決着すべきことではない。

日本語での会話ができず（文献は読める）、日本に来たことのないヨーロッパ出身のユダヤ教徒が、日本のキリスト教思想研究を研究するはあり得ないことではない。研究の実質内容とそのレベルによっては、「日本のキリスト教」研究で、取り上げるべき研究となり得る。メタレベルも含む。

↓

むしろ、「アジアのキリスト教」が研究対象となる際の問題構造を明らかにする必要がある。「アジアのキリスト教」とは、いかなる問いか？

4. アジアとその多様性

アジア自体、そしてアジアとキリスト教との関係性も、多様である。

一方で、問題の明確化のため、範囲をしぼる必要がある。

アジア→東アジア→日本

しかし、他方、絞り込み限定した問題領域が置かれたより包括的な広がり意識することも大切である。日本を論じる？ いかなる文脈で？

5. 「アジアのキリスト教」の解釈学的構造

解釈学的構造（解釈方法・解釈技術ではなく、存在様態＝時間性・歴史性の問題）

6. ガダマー：地平とその歴史性

解釈と存在の地平（制約性・前提性）

Wir kehren also zu der Fragestellung zurück, daß auch das hermeneutische Phänomen die Ursprünglichkeit des Gesprächs und die Struktur von Frage und Antwort in sich schließt. Daß ein überlieferter Text Gegenstand der Auslegung wird, heißt bereits, daß er eine Frage an den Interpreten stellt. Auslegung enthält insofern stets den Wesensbezug auf die Frage, die einem gestellt ist. Ein Text verstehen, heißt diese Frage verstehen. Das aber geschieht, wie wir zeigten, dadurch, daß man den hermeneutischen Horizont gewinnt. Diesen erkennen wir jetzt als den

Fragehorizont, innerhalb dessen sich die Sinnrichtung des Textes bestimmt. (351-352)

Zugehörigkeit zu einer Tradition, Wirkungsgeschichte, Horizontverschmelzung

7. ティリッヒ：伝統と変革の両極性→地平のダイナミズム

「状況とメッセージ」「問いと答え」

the tradition is the link between this foundation and every new generation.

It is a general characteristic of prophetic criticism of a religious tradition that it does not come from outside but from the center of the tradition itself, fighting its distortions in the name of its true meaning, There is no reformation without tradition. (184)

The polarity of tradition and reformation leads to a struggle of the Spiritual Presence with the ambiguities of religion.

Schleiermacher's often quoted words, "The reformation goes on," are certainly true, (185)

↓

「アジアのキリスト教」で問われるべき伝統は、キリスト教の伝統とアジアの伝統の両者であり、しかもその地平融合（対話・討論構造、問いと答え）として理解されねばならない。

8. アジア、その多様性と統一性

- ・重層構造と遠近構造：cosmic / metacosmic (Pieris), pre-axial/ post-axial (Hick)
- ・漢字文化圏・儒教文化圏→文化圏という概念、相互交流の歴史的研究
- ・遅れた上からの近代化と危機

↓

共通の課題と問題（問い）

近代化という歴史的状況＝問いにおける共通性

cf. 島藺進他編『宗教から東アジアの近代を問う——日韓の対話を通して』
ぺりかん社、2002年。

9. アジアにおいて、地平融合を創造的に生成させる「枠組み」は何か。

ピエリス：アジアの伝統的な社会的解放の営みにキリスト教が参与する。

正義の問いとキリスト教のメッセージ

土着化神学か、解放の神学か、の対立を越えて。

10. 「アジアのキリスト教」の問題構造

↓

- ・近代化・貧困・開発
- ・伝統的宗教文化と家族
- ・ナショナリズム
- ・宗教的多元性と宗教間対話

<参考文献>

1. 芦名定道

「アジア・キリスト教研究に向けて（1）－その視点と方法－」『アジア・キリスト教・多元性』（現代キリスト教思想研究会）第3号、2005年、pp.71-88。

「アジア・キリスト教研究に向けて（2）－方法と適用－」『アジア・キリスト教・多元性』（現代キリスト教思想研究会）第4号、2006年、pp.43-62。

「キリスト教学の理念とその諸問題」『「キリスト教学」再考』（日本基督教学会北海道支部）、2009年、pp.52-71。

2. Hans-Georg Gadamer, *Wahrheit und Methode*, J.C.B.Mohr, 1960(1975),

3. Paul Tillich, *Systematic Theology. Volume Three*, The University of Chicago Press, 1963.

4. Aloysius Pieris, *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.